

## 論文の内容の要旨

### 論文題目：流通する「人体」

——近現代日本におけるドネーションの歴史とその記述にかんする一考察

氏 名：香西豊子

本稿の目的は、「人体」という言葉遣いがある種の社会性を具現しているという洞察のもと、流通する「人体」の記述をとおして、われわれの生きる「社会」を記述することにある。この目的を達成するため、ドネーション（「人体」の流通）という事象に内在する論理を、可能な限り一次資料にそって記述する作業をおこなった。と同時に、ドネーションにかんする（二次的な）資料の記述の振幅をとらえ、その意味合いについても考察をくわえた。

本稿は、序章以下、三部構成をとり、十一の章から成る。

まず、第Ⅰ部では、ドネーションの一つのモデル・ケースとして、比較的長期にわたって関連資料がのこっている解剖体のドネーションを採りあげ、第Ⅱ部であつかう他のドネーションの形態との対照に供するとともに（2・3・4章）、それをめぐって現在つむぎだされている「倫理」的な言葉や歴史記述が、解剖体の経済論の帰結である可能性について、注意を喚起した（1・5章）。第Ⅱ部では、現代のドネーションにおいては、〈意志〉という統辞論が主流となっていることを確認したうえで（6章）、血液および移植片のドネーションの動態について検討し（それぞれ7・8章）、ドネーションという事象系にたいする暫定的な見取りを得た（9章）。第Ⅲ部では、そうした現代の（ドネーションのなかの）「人体」がいかに経験されているかについて、人体標本展示会の存立様態をとおして考察したあと（10章）、ドネーションの記述のあり方について総括した（11章）。

各章の筋立ては、具体的には、つぎのとおりである。

まず序章では、上記の本稿の目的を掲げるとともに、ドネーションの歴史を記述するうえでの方法論を検討した。「人体」の現在を捉えるには、その変容を概念史というかたちで直接的に取りだすことがまず考えられる。しかしながら、「人体」の歴史的同定に収斂する記述は、本稿

の問題関心に逆行する。そこで、本稿では、「人体」をとくに定義づけせず、流通という動態において、それを総体的に記述する方法を選ぶこととした。あわせて、のちの考察の準備として、近世のいわゆる「人体」を、腑分の実践にかんする資料をとおして考証し、それが現在いわれているところの「人体」とは異質なありようをしていたことを確認した。

1章では、ドネーションが明治以降に派生した事象であるという、序章から得た推測をもとに、まずは解剖体のドネーションの形態を明治前後でひきくらべた。そして、経済論（いかに解剖体を調達するか）という観点をいければ、両者がまったく別のものであることを追認するとともに、両者のその差異に依拠して、現在、〈篤志〉というドネーションのあり方が称揚されている様相を捉えた。ここで要点となるのは、歴史的な資料が〈篤志〉に適うよう読みだされ、かつほかの解剖体のドネーションのあり方が「倫理」に悖るかのごとく語られるという事態が、〈篤志〉の称揚に並行して起こっているということである。では、その〈篤志〉という言葉の配列規則を解除したとき、資料からはどのような経済論が見えてくるのか。つづく2・3・4章で、それぞれ明治初期・明治中期から戦前期・戦後期の一次資料にあたってゆくのには先だち、その作業をささえる問題提起を、この章ではおこなった。

2章では、明治初年に、解剖が医学のなかに包摂され制度化されてゆくにつれ、解剖体の経済論が発生するとともに、遺体を切り刻む実践にたいする認識論が、おおきく転換していく過程を確認した。近世においては、屍体の配分をめぐる、腑分は試刀（ほか、「人体」を材料にした製薬など）と並びたっていた。それが、明治以降、身体の処遇にかんする新たな言葉が出来ることによって、その平面自体が改変されてゆく。その結果、おなじ「人体」を切り刻むにしても、（医学を迂回して）「人民」に貢献することとなる企図の方は、解剖学として、材料の調達の途をつけはじめた。一方、試刀のほうは、ドネーションの回路を断たれるにとどまらず、その実践自体が廃絶された。

3章では、いったん発生した解剖体の経済論が、明治中期以降、どのようにその「需要」を充たしていったのかを、法制度の変遷および解剖学教室の備忘録にしるされた内規の二面から跡づけた。解剖体の経済論は、生前の無料の治療とのひきかえに死後の解剖を許諾させるという〈施療〉の論理を制度化し（施療患者制）、解剖の際にかかる経費の問題を解消していった。その一方で、引取手のない〈無縁〉の遺体を、養育院や監獄、精神病院等に請い、（ときには法の言葉にそぐわないかたちで）解剖する形態も派生させた。ちなみに、〈特志〉解剖は、このときには、ごく例外的な事象とみなされ、とくに経済論が振りむけられることはなかった。

4章では、戦後しばらくたって、「解剖体不足」という事態が、その要因を探査する言葉によって逆に実定化されていった機序をとらえるとともに、散発的だった〈特志〉がそれによって組織化の基盤をあたえられ、結果的に、〈篤志〉という一つの経済論を形成するにいたる様相を記述した。戦後になって〈無縁〉の屍体を調達することに窮した解剖学教室は、なおも〈無縁〉の屍体を収集しつづけるかたわら、〈篤志〉を解剖体の今後の有望な「供給」源とみなすようになった。そして、一九五〇年代半ば頃より各地で設立されはじめていた遺体寄贈の篤志家団体と協同してことにあたりはじめた。とはいえ、解剖学における解剖体収集活動と、篤志家らの遺体寄贈とは、したがう論理を異にしていたため、しばしばその不咬合を表面化させたのだった。ところが、一九七〇年代の後半に、献体手続の法制化の動きがあらわれるあたりから、両者を架橋する「医の倫理」が立ちあがり、両者の調停がはかられる。その結果、篤志の「有り難さ」が説かれ、いっそう〈篤志〉が推しすすめられるとともに、解剖体の経済論がほかのドネーションのあり方をとることは、しだいに封じられていったのである。

5章では、2・3・4章の記述の事実性に依拠し、1章で捕捉した〈篤志〉の称揚という現象（「倫理」的な言葉の出来や特有の文体をもつ歴史記述）が、解剖体の経済論の帰結としてあることを確認した。それとともに、解剖体のドネーションを傍証として立ちあらわれる、象徴的な日本人論や「習俗」の読み解きが、むしろ現代的な現象であることを指摘した。

第Ⅱ部にうつり、6章では、ドネーションの形態が、解剖体のドネーションで見たような、ただ経済論のみにより規定されているのではなく、流通させられるものによっては、そこに技術論（いかに「人体」を流通可能な形態たらしめるか）も効いてくるということについて考察した。第Ⅰ部で採りあげた解剖体のドネーションは、あらためて眺めかえしてみると、おのずから解剖学の周囲に収束していた。それにたいして、血液や移植片のドネーションは、経済論と技術論とがあいまって、ドナーとレシピエントとを媒介する大がかりな機構をつくりだし、それ自体で事業となっていることを指摘した。

7章では、血液のドネーションの動態について考察した。戦後におこった「東大梅毒事故」は、①血液のドネーションには、(供血者だけでなく) 受血者がいること、そして②そこには「安全供給」の論理（経済論）とはべつに、「安全性」の論理（技術論）が走っていることを公然としめし、血液事業が立ちあげられる支点となった。一九五〇年代半ばには、受血者の「安全」に資するべく血液銀行が設立され、三つの方式（売買血方式・預血方式・献血方式）が派生した（なかでも主流を占めたのは、市場原理にそった売買血方式だった）。だが、一九六〇年代に入る頃には、供血者の「安全」（すなわち、所期の受血者の「安全」）が損なわれる事態が表面化し、ふたたび血液の技術論が問題とされはじめた。そして、経済論の観点からは一線ならんでいた三つの方式に、「有償＝危険／無償＝安全」という分節がもちこまれた。こうして「善意」の献血が「安全」でないはずがないという信憑が制度化されてゆき、同時に「倫理」の言葉が産みだされるようになった。ただし、献血血を「安全」とする信憑の補強は、今度はそれ自体、経済論や技術論と抵触しはじめているのが現状である。

8章では、移植片のドネーションの論理的な動態について考察した。戦後に角膜移植を皮切りにおこなわれはじめた移植医療のドネーションは、既存の法の言葉や血液事業の教訓を参照しながら、ネットワークという形態をとるようになった。だが、角膜移植法、角膜・腎臓移植法、臓器移植法と、法制度の枠組みが拡充されるにつれ、当初より議論されつつの解決をみなかった技術論（ドナーの「死」の判定）および経済論（提供の最終的な「意志」）が、極限の段階まで推しすすめられ、ネットワークの制度を機能不全に追いやっている。これは、〈からだ〉がまずは慣行（「親密」な関係性）のなかに据えられていることの傍証でもあろう。ドネーションに拠らない「家族」間での生体移植は、移植の実施症例数を伸ばしている。

9章では、以上の考察を小括し、ドネーションの現在について暫定的な見取りを示した。すなわち、①ドネーションには派生する経済論および技術論のかねあいから、諸形態が認められること、だが②そのいずれもが、（それぞれに異なる論理の展開の帰結としてではあるが）〈意志〉という統辞法にしたがっており、しばしば「倫理」的な言葉の水準で共鳴していること、③〈意志〉のもとで一個人は「ドナー」と「レシピエント」の二重写しの身体を生きていること等である。

10章では、第Ⅰ・Ⅱ章でえた見取りを補助線にして、ドネーションがひとびとの日常にどのように現れ経験されるのかを、人体標本展覧会の存立様態から検討した。一九九〇年代後半より各地でおこなわれはじめた体標本展覧会は、啓蒙的な企図のもと、〈意志〉の統辞法のうえに人体標本を並べ、数百万のひとびとの眼前に供している。だが、それは、ひとつの産業として、展示会の論理につらぬかれてもいる。そうした磁場においては、標本人体のリアルやドネーションの「意志」は宙吊りにされ、直接的に問うことができないようになっていることを、ここでは確認した。

最終章となる11章では、それをうけて、ドネーションの歴史記述が定位する場所をさぐった。そのために、まずドネーションの現状にたいする議論（「人体」の資源化・商品化論や「贈与論」）を概観した。そして、現代のドネーションという動態に身をおきながら、かつそれを記述することの可能性について考察した。